

映画 『破戒』

島崎藤村の名作「破戒」。同和問題(部落差別)が主題となった物語である。明治時代後期の身分差別の厳しさを60年ぶりに映画化したとあって、公開日を待ちに待って映画館に向かった。

何十年も前に原作を読んでいたが、あえて再読せずに鑑賞した。

始まってすぐ、被差別部落出身者へのあからさまな激しい差別の描写に胸が痛く、涙が溢れて止まらなかった。

「人間は愚かではなく、弱いから差別する」・・・映画に登場する思想家が発言していたが、正義とは何か？不条理とは何か？この中世の身分社会を未だどこかで引きずっている現代社会。現代の私たちは、様々な教育課程で部落差別が何ら根拠のない差別である・・・と理解できているはずなのに。生まれた地域だけで差別され、人としての当たり前の尊厳さえ失われていたこの中世の時代に、正しい信念を貫こうと立ち上がった人たちを素直に尊敬できるし、様々な人権問題解決に向けて今何をしなければならないか・・・これからの活動の礎を作ってくれていたんだ！と解ったような気がした。

これだけは、今も昔も変わらない。差別に打ち勝つためにも、差別をしない人間になるためにも、「教育と正しい知識」が何より大切だということ。

映画の内容とは逸れるが、「差別問題」について定期的に振り返って考える機会は必要だと痛感した。誰しも無自覚に差別してしまっているかもしれないし、その差別感情は自分の弱さから来ていることが多い。

強く生きることは本当に難しいことかもしれない。けれどせめて自分の弱さを自覚し、できるだけ恥じない行動を取りたいものだ意識している。

自分も人権に関わる仕事柄、何事にもまず相手の立場に立って考えることが大事だと自分に言い聞かせることで、人権に対する「点検と気づき」の意識を持ち、自分の心の中に潜む偏見や誤った考え方を改められるよう日々学んでいる。

あらゆる人権課題解決のため活動している日々。ほんの小さな活動でも**明るい未来は開ける！**・・・そう信じて歩んでいきたい。

